~家族と絶縁したら、天才伯爵令息に溺愛されました~ 錬金術師の成り上がり!?



プロローグ

ずっと好きな人がいた。

当たり前に傍にいてくれて、 当たり前に笑顔を返してくれて、 当たり前に手を握ってくれた人。

レナは、それがどれだけ得難い存在であるか知っている。

だから、その当たり前をくれた彼の、特別な女の子になりたかった。

だから、レナは努力した。

彼に、自分を選んでもらえるように。

そして、彼にありったけの想いをぶつけたのだ。

「エド、 貴方のことが好きよ。ただの幼馴染としてじゃない。 恋愛感情の、 『好き』なの」

心臓がうるさいほどにバクバクと跳ねる。

声が、みっともないくらいに震えていた。

それでも、レナは大好きな幼馴染の彼の目を見て、言った。

「えっと、そ、その……」

レナの真っ直ぐな告白を受けて、 彼もまた頬を染めて、 視線を泳がせた。

けれど、それはすぐにレナの元へ戻って来て、 鳶色の瞳を嬉しそうに緩めた。

「ありがとう、レナ。すごく、嬉しいよ。俺も、 レナのことが好きだ」

レナの想いは、彼に伝わった。

間違いなく、レナの恋心は彼に届いたのだ。

夢に見ていたその言葉が、次第に心に沁み込み、歓喜があふれだす。

頬が薔薇色に染まり、花がほころぶように笑む。 にじみ出る感情が、 より一層レナを美しく見

せた。

そんなレナに、エドガーはポカンと口を開き、見とれた。

果たして、自分は今までこれほどに美しい女の子を見たことがあるだろうか

レナは、こんなにも美しい少女であったのか。

しかし そんな少女に愛の告白をされたことを思い出し、 両想いの自覚にエドガー の顔が真っ赤になった。

「わたくしもです! エドガー様、わたくしも妻の一人に加えてくださいませ!」 「私も! 私もエドのことが好き! 私を選べなんて言わない!

私も一緒にいさせて!」

「エド、アタシもだよ。永遠の愛をアンタに誓うよ」

物陰から、三人の少女たちが飛び出して来た。

それぞれがとても魅力的で、美しい少女たち。

その全員がここ最近、 彼に侍り、すり寄り、 好意をぶつけて来たレナのライバルだった。

「ちょ、ちょっと、みんな!!」

三人は彼を取り囲むと、腕を取って絡め、上目遣いに密着した。

やめて、と言いたかった。

今すぐ彼から離れて、と手を伸ばしかけた、その時―

そ、その、えっと……」

彼は顔を赤くして、嬉しそうに微笑んだ。

「う、嬉しいよ。俺も、みんなのことが好きだよ」

その言葉に、レナは愕然とした。

伸ばしかけた手を下ろし、真っ青になって震える手を握りしめる。

エドガーはそんなレナの様子に気づかず、 押し寄せ、 縋りついてくる彼女たちに向かって、

そうに微笑んだ。

「ずっとみんなで一緒にいよう!」

少女たちは嬉しそうに沸き立った。

けれど、一人だけ -レナだけは愕然とした面持ちでエドガーを見ていた。

両腕に女の子を侍らせて、 嬉しそうに 幸せそうに笑う初恋の男の子の姿に、 頭が真っ白に

った

心臓の音がうるさかった。

目に涙の膜が張る。

俯いて歯を食いしばり、ぎゅうつ、と拳を握りしめる。

8

――どうして、どうして、どうして!

幸せだった感情はもうない。

頭に血が上る。

爆発しそうな感情の正体は、怒りだ。

恋が叶ったという束の間の甘やかな感情は薪になり、 更なる怒りの燃料に。

喜びの絶頂から落とされた可哀想な自分の恋心を、 一体、どうやって慰めろというのか。

―もう、無理だった。

レナは強烈な怒りに表情を歪ませ、顔を上げた。

エドガーにじゃれつく少女たちを乱暴に引きはがす。

そして--

「アンタなんて、大っっっっっ嫌い!」

渾身の力をこめて、自分だけを選んでくれなかった欲張りな彼の頬を張り飛ばした。

零れた涙は、 彼には見られずに済んだだろう。 すぐに背を向けて走り去ったから……

無様な泣き顔なんて、彼に見せるつもりはなかった。

(一章 台所錬金術部

ズカズカと人気のない廊下を、レナ・エインズワースは肩を怒らせて歩く。

目指すのは国立魔法学園の校舎から離れた、第三研究棟だ。

第三研究棟は、研究棟なんてご立派な名前には相応しくないような古い建物で、 部室として使っ

ているのは、 学園の課外活動で弱小と呼ばれるクラブや同好会だ。

レナが所属する『台所錬金術部』もまた、そんな弱小クラブの一つだった。

レナは部室のドアを乱暴に開き、叫んだ。

「レナ・エインズワース、振られました! 先輩**、** 慰めて下さい!」

部室にいた四人の先輩は驚きに目を瞬かせる。

そして、その中で一番先に我に返った部長-ネモフィラ・ペンタスはさっと立ち上がると、

手を大きく広げた。

「よし、レナちゃん! 私の胸でお泣き!」

「ネモせんぱぁぁぁい!」

レナは遠慮なくネモことネモフィラの胸に飛び込んだ。

テーブルの上に乗っているネモの契約召喚獣である白いリスっぽい外見のあっくんは「きゅ

あ~?」と首を傾げ、レナを心配そうに見上げている。

ぴゃあぴゃあ泣くレナとそれを抱きしめるネモの周りをウロウロし、 一連の流れを見て、ようやくオロオロと動き出したのは、 台所錬金術部の男子部員たちだった。 「はわわ」とおののく。

「レレレレレ、どどどどどど、どうし、あわわわわ」

「言えてないぞ、イヴァン」

てしまったな?」 「うむ。よし、カレーでも食べるか? 食べて忘れよう。だが、 カレーは私がさっき全部食べ

揃いも揃って役に立たない男たちである。

入ってるから出してきて。チアンはその手伝い! 「うるっさいのよ、アンタたち! 台所錬金術部の部長の命令に従うべく、 イヴァンはお茶の準備! 男たちはそそくさと散っていった。 はい、 さっさと動く!」 ヘンリーは冷蔵庫にチー ・ズケー

* * *

家族仲は悪くはないのだと思う。けれど、レナはいつだって寂しい思いをして来た。 それというのも、 父は役人で、 レナ・エインズワースが生まれたのは、ランタナ王国の王都からほど近い町の平民の家だった。 母は専業主婦。 両親が兄と姉ばかり優先して、 五つ上の兄と、三つ上の姉がいる三人兄妹の末っ子として生まれた。 レナには関心を持ってくれなかったからだ。

兄と姉は優秀だった。

兄は保有魔力が多く、魔法の才能があった。

姉は頭が良く、将来は錬金術師になるのだと勉強に励んでいた。

両親はそんな二人を自慢に思い、レナのことは二の次になっていた。

はなれなかった。 二人は努力家で、レナもそのことは素直に凄いと思っていたし、 尊敬していた。 けれど、 好きに

なぜなら、二人はいつもレナを出来の悪い子として下に見るからだ。

世間一般的に見て、レナの出来は悪くない。

しかし、それでも兄と姉には及ばない。だから二人はレナを出来の悪い子と侮る。 両親に関心を持ってもらいたくて努力しているから、それなりに秀でたところもあるくらいだ。

レナはそれが悲しくて、悔しくてたまらなかった。

家族はレナのことを愛していないわけではない。けれど、軽んじてはい

そんなレナの救いは、 幼馴染の男の子 -エドガー・ラッシュだった。

れた。 エドガーはい つだって弾けるような笑顔でレナの手を引っ張って、 明る い世界へ連れ出 してく

な言葉だった。 に見せれば、 例えば、 初等教育学校のテストで良い点を取り、 返って来たのは「お兄ちゃんとお姉ちゃんみたいにもっと頑張りなさい」という無情 褒めてくれるだろうかとドキドキしながら両親

12

だった。 自分のことを気にかけて、 暖かな場所へ連れ出してくれる男の子に恋をするのは自然なこと

レナはいつの頃からか家族を気にしなくなった。それは、きっと諦めだ。

えた眼差しで微笑み、 けれどその実態は、 レナ以外の家族はエインズワース家は家族仲が良く、温かな家庭だと思っているだろう。 彼等から離れた場所で『完璧な家族』を眺めている。 一つのピースが欠けた不完全で、歪な家庭だ。エインズワースの末っ子は冷

家族がそれに気づくのはいつだろうか?もしかすると、そんな日は来ないかもしれない。 レナにとってはもうどうだって良い話だ。

レナは十六歳になって、王都にある国立魔法学園に入学した。

わず誰でも入れる学び舎だ。 この学園は十五歳以上で、 入学試験で規定の成績を取り、 学費が払えさえれ 国内外、

カリキュラムは単位制で、 最長で十年は在籍が許されている 授業を詰め込めば最短二年で卒業資格が得られ、 逆に学園で多くを学

そんな学園に、レナとエドガーは進学した。

ている姉のように頑張れとしか言わなかった。 名門校に入ってもレナの両親はレナを褒めなかったし、 既に学園を卒業した兄や、 学園に在籍し

出て学園の寮に入ることを選択した。 もはや家族になんの期待もしていないレナは、 そのことにも肩を軽く竦めただけで、 早々に家を

学園での生活は、とても息がしやすかった。

で会うことは滅多にない。 両親もいない。可愛がっているつもりで無意識に自分を下に見ている姉はいるけど、 気まぐれにこちらを気にかけたと思えば、兄や姉を見習って頑張れと鬱陶しい発破をかけてくる この広い学園

レナは自由だった。

入学式を終え、授業が始まると学園のいたるところでクラブ勧誘が始まった。

ているとのことだった。 がいるらしく、 その中でも一番の人気が姉が所属する『錬金術部』で、なんでも関係者に二つ名持ちの錬金術師 学術的なディスカッションをしたい者から利権的な下心のある者まで幅広く所属し

二つ名とは、 偉業を成し遂げた錬金術師に、 国が推薦 錬金術師ギルドの承認をもって贈られ

薬』を自らの手で作り、 しかし、人の寿命でそれを為すにはあまりにも時間が足りない。だからこそ、彼等は『不老の秘 錬金術師は世界の法則、 それを飲むことで不老の身となる。そして、 神秘、 謎を探究し、 解明 新たなものを創り上げる者のことを指す。 不老の身となって初めて錬金

術師を名乗れるのだ。

者に尊敬される。更に二つ名持ちともなれば、その偉大さは伝説の英雄にも及ぶかもしれない。 錬金術師になるには膨大な知識を学ぶ必要があり、挫折する者は多い。 故に、 錬金術師は多く

14

持ちの錬金術師が気になるらしく入部を決めていた。 レナは姉が所属しているこのクラブに入部するつもりは最初からなかったが、エドガーは二つ名

団へ飛び込み、そちらをメインに活動するつもりらしい。 レナとしてはちょっと面白くなかったが、彼は兼部で『魔法剣士養成部』 というエリ

に目を止めた。 エドガーと別れ、 気のない様子でクラブ勧誘を流し見していたレナだったが、 やがてあるクラブ

すか?」と尋ねたくなるようなものだった。 それが『台所錬金術同好会』だった。 台所錬金術同好会の勧誘方法は、 一言で言うなら「正気で

な四人の生徒が、スパイシーな香りのする大鍋をかき混ぜていたのだから…… なぜなら、黒いとんがり覆面を被り黒いローブを着た、どこの黒ミサ集団かと問いたくなるよう

ブーンを持ち、 そんな黒ミサ衆を取り囲んでいるのは、運動部らしきむくつけき男たちで、 その時を今か今かと待っていた。 各人が両手に皿とス

「よし。それでは諸君、 米をよそえ

うおおおお、 と男たちは喜びの声を上げ、 でかい飯炊き釜を開けて米をよそっていく。

「ネモ部長! ネモ様! トッピングのお慈悲はないのでしょうか?」

「唐揚げとゆで卵ならタッパーに入ってるわ。 一人一個までね。あと福神漬けはスプー

うおおお! 女神ネモ! 最高! と歓声を上げて男たちはタッパーに群がる。

そうして米が盛られた皿にトッピングをのせ、大鍋の前に並んでいく。

のだが、アレはなんだろうか? ……よく見てみれば額に宝珠のある大きめの白いリスのような動物も皿を持って列に並んでいる

理なのだと分かる。 いた。見た目はビーフシチューっぽいが、それより色味が少し黄色っぽく、 順番が来た人を見ると、ご飯の上に茶色いドロッとしたソースらしきものをかけられてもらって 匂いからも全く違う料

食欲をそそる香りに誘われ、 レナは順番待ちをしている人にそっと話しかけた。

「あの、 「 ん ? これってあの料理を待つ行列なんですよね? あれは『カレー』っていう料理だよ。 それと、この行列は台所錬金術同好会の勧 あれって、 なんていう料理なんですか?」

は新入生だから。 んだ。だけど腹減らした野獣共が食わせろってうるさいから慈悲で食わせてやってるんだよ。 「はじめまして、新入生。戸惑うのは分かるけど、 その答えにキョトンとしていると、黒ミサ頭巾の一人がレナに皿とスプーンを差し出した。 在校生のこいつらはついで」 これは本当に台所錬金術同好会のクラブ勧誘な

そしてトッピングをのせてみろと促され、隣にいた男子生徒にこれは絶対に外せないからと、鳥 是非食べてってよ、と言って、迷っているうちにその皿にご飯をよそわれてしまった。

肉の揚げ物と刻んだピクルスのようなものを皿にのせられた。

「ゆで卵も美味いんだが、腹に余裕がなければやめといた方が良いな」

「えっと……、そうですね。今回はやめておきます」

いつの間にか食べる流れになっているが、レナはまあ良いか、と流れに身を任せることにした。

少なくとも一食分のお金が浮くし、未知の食べ物に興味があった。

順番が来てご飯にどろりとカレーがかけられた。

お礼を言ってそそくさとそこを離れ、 いただきます……」 花壇の縁へ腰を下ろす。

ドキドキしながらスプーンでそれをすくい ーパクリ。

美味しい!)

一口食べて、 レナの瞳が輝いた。

それからパクパクと食べ続け、箸休めにピクルスもどきを食べ、その甘さに更に瞳を輝かせる。

揚げ物とカレーの相性も良く、 スパイスの効いたカレーをジューシーな鶏肉と共に口いっぱいに

ほおばると幸せな気持ちになる。

そうやって夢中になって食べて、あっという間になくなってしまった。

美味しかった」



一息ついたところで、目の前にそっと紙コップが差し出された。

あ、あああの、これよかったら……」

ピッチャーを持っており、どうやら紙コップの中身はそのレモン水らしい。 驚いて顔を上げれば、 背の高い黒ミサ頭巾がいた。彼はレモンの輪切りを浮かせた氷水の入った

「ありがとうございます」

る白リスもどきが仰向けになって、でれん、と乗っていて、「きゅあ~」と満足そうな鳴き声を零 している 笑顔で礼を告げると、「ひぇっ、どういたしましてぇ……」 変な人だなぁ、と思っていると、別の黒ミサ頭巾が近づいてきた。肩には丸くなったお腹をさす と小声で言って素早く離れて行 った。

体格から女性と分かるその人は、 レナに向かって明るく声をかけた。

「こんにちは、新入生ちゃん! うちのカレーライスはどう?」

「カレー……ライス?」

ライスにカレーをかけるから『カレーライス』よ、と言われ、 なるほど、

「とても美味しかったです」

させてね。あ、 「ありがと! それで、うちは台所錬金術同好会っていうんだけど、一応活動内容をちょっと説明 別に食べたから絶対に入会しろ、 ってわけじゃないから安心して」

そう言って、彼女はレナの隣に座る。

自己紹介するわ。私はネモフィラ・ペンタス。ネモって呼んでね。三年生で台所錬金術同

好会の会長をしているわ。 シャス。あっくん、って呼んであげて」 それから、こっちの肩に乗ってるのが幻獣で、契約召喚獣のアセビル

から台所でできるようなモノを作ってるの。 しといてね。それで、 「よく聞かれるんだけど、うちは錬金術部とは別のクラブよ。下部組織でもないから、 よろしくね、 と言って手を差し出されたので、 何が違うのかっていうと、 うちは『台所でできる錬金術を探る』という理念 レナはおずおずとそれを握り返した。 建前としてね」 そこは理解

「建前……」

はカラカラと明るく笑う。 シレっとクラブの理念を建前と言い切ったネモに、 レナは少し呆れた顔をし、 その反応に、

ん、ポーションとか作ったりして錬金術らしいこともしてるわよ?」 「クラブ活動なんて、 楽しんでナンボでしょ! 私たちがやってることは、 七割は料理ね。

「そうですか……」

果たしてそれで良いのだろうか? こんなに美味しいものが作れるのなら、 まあ、 とても良いクラブなのではないだろうか? それで今まで続いているのだから良い のだろう。

-しかし、入る前に確認しておかなければならないことがあった。

あの、その頭巾はいったい……」

「ああ、これ?」

そう言ってネモは簡単に頭巾を脱いだ。

をいささか食ってしまっている。 よりも生命力に満ちた瑠璃色の瞳がなにより印象的で、

ネモはセミロングの髪を整えながら言う。

のよ。だからこうやって顔が分からないように頭巾被って勧誘してるわけ」 目当てで来られると迷惑なのよね。そういう奴って、媚びを売るだけでまともにクラブ活動しない 「うちの同好会なんだけど、実は会員の中に名前と顔が特に売れてるのが二人いるのよ。 そい うら

その言葉に、 レナは首を傾げる。

後々出てきそうなものなのだが…… そんなに有名な人間が所属しているなら、 ここで顔を隠してもクラブに入りたいという申

レナのそんな疑問を察したのか、 ネモは肩を竦めて言う。

だから、入会受付の期限を設けて、兼部は認めない方針にしているの。兼部が駄目だと分かると、 わざわざ入ろうとする奴はあんまりいないし、 「まあ、 結局学園生活を送っているうちに、そいつらがうちの同好会に所属してるのは 期限は今日から一週間の間だけだから、 そう簡単に バレるわ。

なるほど、 とレナは頷い

もし貴女が入ってくれるなら嬉しいわ」 「うちは四人しかい 、ないから同好会なんだけど、 五人から正式に部として認められるの。 だから、

明るく笑むネモに、 レナもつられて微笑む。

会長がこの人なら、 きっとクラブ活動は楽しいだろうと思えるような笑顔だった。

そして翌日、 早速入会届を提出しに行った。

そしてレナが入会したことで同好会から格上げして『台所錬金術部』となった最初のクラブ活動 レナは自己紹介で初めて知ったクラブのメンバーに驚くことになる。

もどきのあっくん。そして、三人の男子生徒だ。 口をぱっかり開けて唖然とするレナの前にいるのは、 台所錬金術部の部長であるネモと、 白リス

く微笑んだ。 その男子生徒のうちの一人― ―短髪の赤毛に、 榛色の瞳の生徒は、 レナの動揺する姿を見て、

「そうよ。こいつはこのランタナ王国の第三王子、 ヘンリー・ランタナ」

兄上は王位に就いていて、男子が二人も生まれている。 「副部長のヘンリーだ。まあ、気になるかもしれないが気楽にしてくれ。 俺の重要性は低いからな」 母親の身分が低いうえに、

そうして肩を竦める彼の言う通り、 ヘンリーの地位は王子の割には低い。

ヘンリーの父である、 前国王陛下が気まぐれに手を出したメイドに、 予想外に子供ができてしま

い、生まれたのがヘンリーだった。

げられた。 いる。 ヘンリーの母親は男爵家の出で、とてもではないが側妃となれる教養はなく、妾妃として召し上 その母もヘンリー が五歳の頃に後宮を辞して、 王城に勤める子爵家の文官の元へ嫁い

そんな身の上なので、 後ろ盾も弱く、 政治的な面では味方に付くには旨みが少ないのだ。

そこに、部員の一人が口を挟んだ。

「重要性の低さなら、私の方が上だな」

「なんの勝負してるのよ? アンタも皇子様でしょ?」

それを聞き、レナはぎょっとした。

貴族より力がないな」 カンラ帝国の第十八皇子だが、 「まあ、そうだが……。自己紹介しよう。私はチアン・カンラ。 我が母も実家の位が低いうえに、 十八番目の皇子ゆえ、 ネモやヘンリーと同じく三年生だ。 そこら辺の

の青年とは言えなかった。なにせ、 「そんな面倒なことはしない」 「力がないってことはないわよ。アンタの顔はその気になれば国を傾けることができるわ」 飄々とした態度でそう言うのは、 彼はこの世の誰よりも、見たことがない位に美しかったのだ。 長く美しい黒髪に、黒い瞳を持った青年だった。しか

けてのラインはきっと芸術家が理想とする形だろう。まさに、 彼の長い黒髪は絹糸の如く艶やかで、 切れ長の目は涼やかだ。 神の最高傑作と言えるような絶世の 鼻梁はすっと通り、 頬 から顎に

美貌がそこにあった。

「カレーさえあれば私は満足だ」

「このカレー皇子が……」

ネモは呆れたように溜息をつき、最後の一人を呼んだ。

「イヴァン、自己紹介」

は、 鳥の巣頭の黒髪のその人は、背の高い体を縮こまらせてオドオドとそう答えた。 僕はそっちの才能がなくて……」 はい。えっと、僕はイヴァン・ウッド。 二年生。 実家は一応伯爵家で、 代々騎士の家系だけ 前髪に隠れてほ

衣とその鳥の巣頭があいまって、 とんど見えないが、チラっと見えた瞳の色はアイスブルーだった。 「騎士の才能はなくても錬金術の才能はあるでしょ。顔と名前が売れてるのはこっちの王族二人だ 全体的にだらしなく見える。 皺のよった制服に、 薄汚れた白

たら教えてもらいなさい」 けど、イヴァンは錬金術の関係者の間では天才と言われているわ。 勉強で分からないところがあっ

し、師匠?」

あわわ、と慌てるイヴァンに「学園で師匠って呼ぶな!」 しかし、『師匠』とはどういうことだろうか? とネモがツッコミを入れてい

レナが首を傾げていると、ヘンリーが苦笑気味に言った。

一俺たちの名前が売れてると言うが、 一番名前が売れてるのはネモだろ?」

「そうだな。なんたって二つ名持ちの錬金術師様だ」

「え?」

で見つめた。 レナは思わず声を上げるが、 何を言っているのか上手く理解できず、先輩二人をポカンとした顔

「知ってるかな? 二つ名持ちの錬金術師が錬金術部の関係者にいるっていう噂

しまってな。まあ、二つ名は知られていても、顔と名前は知られてなかったからな」 「アレはネモのことなんだが、どこでどう捻じ曲がったのか、錬金術部の関係者という話になって

いえ、よく気づかれないもんだよな」 「錬金術師ってのは二つ名の方が有名になって、本名が置き去りにされることも珍しくない。とは

錬金術師』だ。歳は聞くな。ババア扱いしたら怒り狂うからな」 「調べれば分かるんだが、噂を鵜呑みにする奴は多い ―と。そうそう、ネモの二つ名は『白銀の

先輩方の言葉がどこか遠くに聞こえる。

王族二人に、天才が一人、極めつけに二つ名持ちの錬金術師

た。そして…… レナはクラブの先輩たちが普通なら到底お目にかかれないような人間ばかりと知り、 混乱してい

「うーん……」

「えっ?!」

「新入生!!」

「ちょっ、レナちゃん?!」

「きゅきゃっ!!」

「わあああああ?」

そのまま、ふらり、と体が傾く。

オーバーヒートして薄れゆく意識の中、レナはぼんやり考える。

――私、ちゃんとやっていけるかな?

* * *

結果を先に言えば、問題なかった。

被っているようだが、 ただ、やはり王子コンビは地位ある人なので、クラブ活動外ではそれなりに外面を整え、 台所錬金術部の先輩たちはみんな気さくで、本当に普通の学生と変わらなかった。 貴族とはそういうものだ。

だの女学生として学園生活を楽しんでいるらしい。 ネモは二つ名持ちの錬金術師だが、彼女が二つ名持ちだということは本当に知られておらず、 た

か? しかし、なぜ二つ名持ちの偉大な錬金術師である彼女が、 不思議に思い聞いてみれば、 意外な理由が返って来た。 わざわざ学園に通っているのだろう

けるには、こうやって学園に入って学びなおすのが一番効率的だと思ったの」 がかかる手法に成り下がってたりするのよ。それを学んで比較して、 日々新しい技術とかが生まれてるわけ。百年前では最も効率的だった手法が、今ではやたらと手間 「あー。それね。うーん……、 確かに錬金術師はそこら辺の人間より知識量は多いけど、 今現在の最も良い方法を見つ 世の中、

26

なるほど、とレナは感心するように頷く。そして、やはり錬金術師とは『学び続ける人』 と尊敬の念を抱いた。 なのだ

しかし、そこで口を挟んできたのがチアンだった。

に中庭でカレーの鍋をかき回してたではないか」 「お前の場合はそれだけではないだろう。転生者の ヘンリー が学園に入ると知って、 奴を釣るため

ネモはサッと視線を逸らし、知らんぷりをした。

どういうことかと尋ねれば、 チアンは鉄面皮ながらも、 瞳に悪戯っぽ い光を湛えて言う。

「実はな、三年生の俺たちは全員転生者なのさ。それも、 どうも同じ異世界らしくてな」

レナは目を丸くした。

転生者とは、前世の記憶を持つ者のことを指す。

界が重なることは滅多にない。 同じ異世界というのは珍しい。 転生者は町に行けば一人や二人はいると言われおり、珍しくはあるが騒ぐほどでもない。 大体はこの世界か、 無数にある異世界のどこかで、 転生者同士の世 しかし、

「こいつは『エアコン』という名の魔道具や、 『漫画』を世に送り出した王子の話を聞い

ためにな」 異世界出身じゃないかと目を付けたんだ。全ては奴の金と権力を使って『醤油』 B 『味噌』を作る

思わずネモを見れば、 チアンはそれを見て面白そうに微笑んだ。 彼女は明後日の方向を向いて、ぴっぷ~と下手な口笛を吹い -顔が良すぎて目がくらみそうだ。 てい

の世界には存在しない料理であるカレーを作って奴を釣ったのさ」 やはりあいつも王子様だからな。そう簡単には近づけない。 だから同じ学園に入って、

「……まさか、アンタまで釣れるとは思わなかったけどね」

観念したようにネモは溜息をついた。

「まあ、良いのではないか? 奴も醤油や味噌に飢えていただろう」

「そうね。結果オーライかしら」

どうやら、 ヘンリーは確かに政治的な地位は低いが、実は他の王族と比べても金持ちである。チアンが言う 今ヘンリーが行っているという新しい調味料造りの裏側にはネモがいたらしい

ように『エアコン』を作り、 植物紙作りや印刷技術はその昔、どこかの転生者が創り出して世に広まり、今や庶民でも本が 絵も楽しめる物語である『漫画』を世に送り出している。

その手の人間に神として崇められ、 手に入りやすくなった。そこから漫画の普及という娯楽面での更なる発展を促したヘンリー王子は コアな信望者を獲得している。

「正直、 某漫画の祭典の如き『漫画祭』が開催されてるとは知らなくて、 私もそれには驚いた。 奴はいったい何をしているのかと……」 何事かと思ったわ_

微妙な顔をして苦笑し合う先輩二人に、レナは首を傾げる。

幅広い層の作家が描いた漫画が売られており、 二人が言う『漫画祭』とは、ランタナ王国が夏に開催している漫画の祭典だ。素人からプロまで 毎年各地から多くの人が訪れている。

「百合園の民や薔薇園の民が生まれちゃってさぁ……」

「うむ。あれはな……。なぜ私たちが申し訳なく思わねばならぬのか……」

知らないでくれ、と言われてしまった。 深々と溜息をつく先輩二人に、百合やら薔薇だのとは何かと尋ねれば、 知らなくて良い、 むしろ

「それより、アレだ。味噌と醤油の進捗状況はどうなんだ?」

初だから売れる数はお察しだけどね」 「あー、そうね。良い感じらしいわ。 商品として売り出すのは来年くらいになるみたい。 まあ、

「そうか、楽しみだな」

あははーと、実にわざとらしい話題転換を経て、二人は空笑いする。

にした。 どうやら触れてほしくない話題のようだ、と察して、 良い子のレナは先輩の話題転換に乗ること

「その『ショウユ』や『ミソ』ってなんですか?」

二人は少しホッとした様子でそれに答えてくれた。

「醤油や味噌っていうのは、私たちが異世界で食べていた発酵調味料のことよ

「まさに故郷の味というやつでな。探してもなくてなぁ……。 魚醤ならあったんだが……」

やはり原料が違うと味が違う、 と残念そうにチアンは言う。

「美味しいんですか?」

「美味しいわよ~」

「ネモ、 お前は自家製味噌を作っていただろう。 今度豚汁を作らないか?」

ああ、 それも良いわね、 とネモが頷く。

「今度食べさせてあげるから、楽しみにしててね

「はい、楽しみにしてます!」

レナはヘンリーがショウユとミソを市場に売り出す日が待ち遠しくなった。 そして数日後、約束通りに作ってくれた『トンジル』という具沢山のスープはとても美味しくて、

「そんなに気に入ったなら、同じクラブのよしみで直接売ってやるよ。多分、 今のままだと店先に

並ぶのはもう少し先になると思うからな」

ヘンリーのまさかの申し出に、 レナが喜んだのは言うまでもない。

*

二年生の先輩、 イヴァン・ウッドは心配性だ。

しかし、これはレナが入部早々に倒れたのがいけなかった。

どうにもイヴァンはレナのことをか弱い少女とでも思っているらしく、 オドオドしながら色々と

手助けしようとしてくれる。

「そ、その鍋、重いでしょ? 僕が持つよ」

「大丈夫ですよ、これくらい持てます!」

れるまで待ってあげてと言われたこともあって、レナはのんびり待つつもりだ。 ネモによるとイヴァンは人付き合いが苦手で、 ついオドオドした態度をとってしまうそうだ。慣

かっていた。 それに誤解とはいえ、 レナのことを心配して気にかけてくれるのだから優しい人であることは分

「う、うん。それは分かってるんだけど……」 「イヴァン先輩、私は別に病弱とかじゃないんですから、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ?」

レナは小さいから……、と続いた言葉に、思わずムッとする。

「私の身長はこれから伸びるんです!」

「えっ、あっ、そうだね。ご、ごめんね?」

そんなやり取りをしていると、不意に部室のドアが開けられた。 丸くなっていた背をますます縮こまらせて謝るイヴァンに、 仕方ないなぁ、 と小さく溜息をつく。

ドアから顔を出し、 部室に入ってきたのはネモだった。ネモは丸まっていたイヴァンの背を見て、

「イヴァン、猫背!」柳眉を逆立てた。

「は、はいいいい!」

シー と景気よくひっ叩かれ、 びょん、とイヴァンの背が伸びる。

目線が格段に上がったイヴァンを見て、レナは思わず口にした。

「イヴァン先輩は育ち過ぎじゃないですか?」

「えっ、えっと……」

どう見ても一八○センチメートル近くあるだろうイヴァンに、 嫉妬交じりの視線を突き刺せば、

彼はやっぱりオロオロと挙動不審になる。

結構な美男子かもしれない。 そのままじっとイヴァンの顔を見上げていると、あることに気づいた。 この先輩、 もしかすると

悪くないように見える。目元が見えればはっきりするのだが…… 鳥の巣の如きボサボサ頭に気を取られて見落としていたが、よく見れば鼻筋も、 顔の輪郭だって

「……先輩、その前髪は邪魔じゃないんですか?」

「えっ? いや、えっと、別に気にならないし……、 この方が落ち着く……」

ボソボソと小さい声での返答に、もったいないなぁ、と思う。

そして、 再び丸まってきたその背中を、 部長様に倣って「先輩、 猫背!」と言ってひっ叩 (V

31

第二章 恋のライバル

ドガーと過ごす時間はあまり良いものではなくなってきていた。 ナの学園生活はそれなりに充実し、特にクラブ活動は楽しいものだったが、それに反して、

近づいて来たからだ。 それというのも、彼はレナが知らぬ間に女の子の友人を増やし、 その子たちが馴れ馴れしく彼に

そう、恋のライバルの登場であった。

「エド、その人、誰?」

買い物の約束をして、 待ち合わせ場所で待っていると、 エドガー が現れた。

――金の巻き毛が美しい、青い瞳の美少女を腕に引っ付けて。

思わず眦が釣り上がる。

嫉妬の滲む硬い声の問いに、 エドガーは少し困ったように笑んだ。

出会ったんだ」 「この人は俺たちと同じ学園に通うアニエス・プレストンさんだよ。 ちょっと前、

スを助けたのだという。 エドガーが言うには、 魔法剣士養成部の野外活動で森に入り、 そこで魔物に襲われていたアニエ

「……それで?」

えっと――」

「私から説明するわ!」

とを見比べて、思わず歯軋りしそうになる。 アニエスが胸を張って前に出る。その時にゆさっと揺れた胸と、 ストンと凹凸が少ない自分の

たのだと言う。 アニエスがなぜここにいるかというと、今回の買い物に、 自分の実家が経営する商店を薦めに来

かっているの!」 「命を助けていただいたのですから、 お礼に全て無料でお譲りするように、 とお父様から言い 9

に入れても痛くない程に可愛がっている。 アニエスは大商人の娘で、プレストン家の当主である彼女の父親は、 三人の娘達をそれはもう目

とを言っていたのだ。 可愛いアニエスの命の恩人となれば、店にあるものなら幾らでも持って行ってくれ、

「ベ、別に、貰っていただくのは私でも良いのだけど……」

小さく付け加えられた言葉はエドガーには聞こえず、レナにだけ聞こえていた。

「まあ、そうだったの! レナは鋭くアニエスを睨み付けるも、 エドは人助けをしたのね! 偉いわ! すぐに咳払いして内心を隠し、笑顔を張り付けて言う。 けど、 エドはお礼が欲しくて貴

女を助けたわけじゃないと思うの!

そうよね、

エド?」

そ、 ニッコリと圧のある笑顔を向けられ、エドガーは引き攣った笑みを浮かべて大人しく同意する。 そうだな。わざわざそんなお礼はいらないよ。気にしないでくれ

34

全部タダというのはちょっと重い。 エドガーはただの平民だ。何かしらお礼に一つちょっとした物をいただくというのならまだしも、

しかし、そこで引かないのが商人の娘だ。

利益を得るため、ありとあらゆる手段を用いるのは常識である

引するわ!」 「まあ。謙虚なのね。 それじゃあ、 割引するのはどうかしら? 貴方のお友達もせっかくだから割

ヒビが入りそうになる。 『お友達』を強調し、 お邪魔虫にも寛容な態度を示してあげるとばかりに見下され、 レナの笑顔に

割引……」

「レナ、せっかくだし、 腹立たしさに煮えくり返るレナの内心を知らず、 割引なら良いんじゃないかな?」 エドガー はその誘いに心が揺り動かされてい

「歓迎するわ!」

は引き出せない。 シップに、エドガー 乗り気になったエドガーに、アニエスが笑顔で飛びついた。 が赤くなってあわあわと慌てているのが腹立たしい。 腕に胸を押し付けるようなスキン レナでは絶対にその反応

ナはべりっと音がしそうな勢いでアニエスを引き剥がして、 微笑んだ。

ことはできないわ」 「ウフフ、私は遠慮しますね! 私がアニエスさんを助けたわけじゃないので、そんな厚かましい

「あら、気にしなくても良いのに!」

笑顔は威嚇の動作とはよく言ったものだ。 のゴングが高らかに鳴ったのだった。 まさにその言葉の通り、 笑顔の応酬の裏で、 カーンと

r k

まさかの恋敵出現に、レナは焦った。

エドガーを取られまいと彼の傍にできる限りいるようにし、 自分に磨きをかけた。

恋する乙女として美容に励むレナに協力してくれたのは、 同じ乙女であるネモだった。

「十代の乙女の青春! うっ、眩しい……!」

「お前の青春は大昔の話だもんな」

ある美容液や、 余計なことを言ってヘンリーが尻を蹴飛ばされていたが、 ヘアパックの作り方を教えてくれた。 ネモは錬金術で作る素晴らしい効果が

おかげでレナの肌は赤ちゃんのようなたまご肌になり、 黒のボブカットは艶を増した。

ら「き、 先輩たちはレナの努力の成果を口々に褒め、未だにレナに慣れない 綺麗になったね」と言ってくれ、 レナは自信を付けた。 イヴァンですら、どもりなが

てもその日常に変化が訪れた。 そうやってレナとアニエスがエドガーを挟んで睨み合う日々がしばらく続いたが、 ある日またし

「はじめまして。アヤメ・タチバナと申します」

増えた。

恋敵が増えたのだ!

黒子のせいで妙に色気を感じる。 た美少女だった。一目で東方の出と分かるいでたちで、 よろしゅうおたの申します、 とはんなり微笑んだのは、 垂れた目が優しげなのに、 癖の無い長い艶やかな黒髪に黒い目をし 左眼の下の泣き

愕然とするレナの隣で、アニエスがアヤメを睨み付けている

「それで、その子がどうしたの?」

「ああ、うん、 実は……」

タナ王国の魔法学園に留学して来たのだという。 エドガーが言うには、彼女は東方の島国の 貴族の 出で、 望まぬ婚姻から逃れるためにここ、

「ですけど、ここでも困ったお方に目を付けられて……」

憂鬱そうに溜息をつく姿が色っぽい。

にされそうになったんどす」 「うちの実家もそこそこええ家なんですけど、 その方にはよう分からんかったようで、 無理やり妾

東方の貴族の階級はランタナ王国周辺とは違う上、遠方故に付き合いが薄い。 そのためランタナ

アヤメが出会った男も、 国の貴族の中には知識不足なせいで向こうの官職や位階を言われても分からない者もいる。 そういう部類の無礼な人間だったのだろう。

後日それを知ったヘンリーが、「アヤメ嬢は大納言の娘だぞ!? それはまた別の話だ。 -つまり、上流貴族だ! 外交問題じゃないか!」と激怒し、 部室を飛び出すことになるのだ 政治を司ることのできる上

のだという。 とにかくアヤメはそんな男に絡まれて困っていたところをエドガーの機転にて脱し、 撒いて来た

「実家に連絡して抗議しようにも、 青ざめ、鳥肌を立てた腕をさするアヤメに、さすがにレナやアニエスも同情した。 時間がかかるし、それまでに実力行使されそうで……」

「大変じゃない。大丈夫?」

相談してみましょうか?

た。帰って来るのがいつになるか分からず、ただの平民であるレナは待つことしかできない。 「あの、私が所属するクラブに地位のある方がいるので、 二人の気遣いに彼女は眉を下げ、レナの申し出には、「頼みます」と申し訳なさそうに頷いた。 その後、レナはヘンリーに助けを求めて走ったが、ヘンリーは残念ながら用事で学園を休んでい

-……、それは困ったわね。チアン、アンタはなんとかできない?」

時間がかかる」 「無茶を言うな。 他国であるうえ、 私は第十八皇子なのだぞ? ヘンリー に連絡を入れることすら

難しい顔をするネモとチアンに、 レナは思わずイヴァンを見るが、 高速で首を横に振られてし

だけ時間がかかるか!」 の木っ端貴族なんだ。しかも、 「皇子殿下であるチアン殿下ですら時間がかかるんだよ? 五男坊の僕の進言なんて、 ヘンリー殿下のところまで行くのにどれ うちは伯爵といえど、実情は名ばかり

に入る役人に重大さが理解されず、 確かに事は外交問題に繋がる危険性をはらむが、 進言が後に回されたり、悪くすればなかったことにされる可能 それを理解せずに絡む貴族がいるように、

していた。 なかった。そのためすぐに連絡ができるような手段を持っておらず、 公務中に連絡を入れるなどという記録に残りそうな手段をとったことがなく、その必要も今までは る可能性があったため、これまで彼等はあくまで気楽なクラブ仲間というスタンスを崩さなかった。 ネモは二つ名持ちの錬金術師だし、チアンは他国の皇族だ。 公にして交流をすれば面倒が起こ 今日初めて困った事態に遭遇

「まずいことになったわ。 「奴のビジネスパートナーのところへ行くか? ヘンリーは王城暮らしだから、 印刷所や商家から連絡を入れてもらった方が早そ 家に乗り込むなんて無理だしね……」

にポツリと零した。 先輩たちの話し合いをハラハラしながら聞いていたレナの隣で、 イヴァンが何かに気づいたよう

「そういえば、 ショウユやミソの原料って、 東方の豆ですよね? これで何かあれば、 豆の輸入が

ストップするんじゃ?」

それを聞いたネモとチアンは一瞬固まり、悲鳴を上げた。

「そうよ! そうだったわ! 大豆はまだ東方に頼ってたわ!」

信させられる光景だった。 「まずいぞ。この国で大豆の生産はまだ試験段階だ。ここで大豆の輸入に制限をかけられたら……」 二人の真剣味が増した。悲しいかな、 実に酷い光景である。 この二人を動かすには、 良心よりも食欲で釣るべきだと確

の知識不足の貴族の坊ちゃんが仕掛けて来た。 それぞれが伝手を辿り、ヘンリーに連絡を入れようと動いたが、 ヘンリーに連絡が行く前に、

力ずくでアヤメを奪おうとしたのだ。

しかし、エドガーはそれをどうにか防ぎ、アヤメを守り切った。

錬金術師の成り上がり!? 家族と絶縁したら、天才伯爵令息に溺愛されました

現場にいなかったレナがその報告を聞いた時、 アヤメはうっとりと頬を上気させていた。

「本当に、ステキでしたわぁ」

いや、俺はただソウメイさんが来るまで時間稼ぎしただけで……」

メとエドガーで逃げ回る羽目に陥ったそうだ。 ついている一人だ。本来なら彼がずっとアヤメについていたのだが、 ソウメイというのはアヤメの使用人の一人なのだが、 かなりの剣の腕前で、護衛を兼ねて彼女に 隙をつかれて分断され、

しかしソウメイが来るまでエドガーが彼女を守り切ったらしい。

「俺なんか切り結ぶのが精いっぱいだったのに、 ソウメイさんは一瞬であいつらを叩き伏せてた

どうやらエドガーは己の力不足をまざまざと感じさせられたらしい。

俯いて悔しそうな顔をするエドガーの手を、レナはそっと握る。

「ねえ、エド。エドはまだ学園に入って剣を学び始めたばかりでしょう?」

「うん……」

彼が入った魔法剣士養成部は、 故郷で剣を振り、魔法を独学で学んでいたが、正式に学び始めたのは学園に入ってからだ。 良い学びの場になっていると聞いていた。

まる。ここで剣を振るのをやめるなんてこと、 「貴方はまだ歩き始めたばかりなのよ? これからなの。これからどうするかで、 しないでしょう?」 未来の貴方が決

瞳が飛び込んでくる。 そろりと顔を上げたエドガーの目に、優しく、そして心からエドガーを信じているレナの緑色の

決意を新たにしたエドガーに、レナは嬉しそうに微笑んだ。「……ああ、もちろんだよ。俺は、これからも剣を振り続ける!」

ヘンリーによって例の貴族のボンボンは王族直々に叱責され、屋敷に蟄居の身となった。 翌日にヘンリーが学園に戻ってきたため、連絡よりも前にその場での報告が行われた。激怒した こうしてアヤメの問題は解決し、エドガーはアヤメから是非お礼をさせてほしいとの申し出を受 その後、アニエスとアヤメが二人の間に割り込み、グダグダになって報告会は終了した。

けた

「これを逃したら、 それを聞いたエドガーは遠慮することなくソウメイからの稽古をお願いした。 ソウメイさんみたいな剣豪に稽古してもらうなんて機会はなさそうだったか

それからの生活にはアヤメが加わるようになり、 そう言って苦笑いしながら頬を掻くエドガーに、 確かに、 エドガーの周りは更に騒がしくなった。 とレナは頷い た

ることになった。 エドガーを中心にして彼を取り合うことが続く日々。 冬休みに突入し、 レナとエドガーは帰省す

レナの家族はやはりレナをぞんざいに扱ったし、 家族の中心は兄と姉だった。

していた。 兄は仕事でどんな地位につき、手柄を立てたかを誇らしげに話し、姉は自分の研究の成果を自慢

しかし、それを聞いたレナは思わず首をひねった。

昔は凄いと思って聞いていたそれを、 今は凄いとは思えなくなっていたのだ。

「ネモ先輩たちの方が凄い……」

思わずこぼれた本音は、その小ささ故に家族には聞こえなかった。

そう。レナは兄や姉より、凄い人を知ってしまったのだ。

王族二人。 ヘンリー王子は手広く様々な事業に関わっており、 常に忙しそうに仕事をして

人の使い方が上手いのだ。 チアン皇子はまずその美貌に目が行きがちだが、とにかくあの人は要領が良い。 なんというか

に立つことに向いている人間だろう。 か良い地位を築いている。顔の良さもさることながら、魅力ある人で、カリスマ性もある。 人をよく見ていて、誰に何が向いているのかを把握しており、 助言して恩を売り、 学内でなかな 人の上

かしいのだ。 『台所錬金術部』の名の通り、彼女は台所でできる錬金術を行うのだが、そのレベルが明らかにお 一つ名持ちの錬金術師であるネモは、もちろんとんでもない錬金術の腕前を持っている

に仰天したことがあった。 ある日、小鍋を使って何かを作っている彼女にレナが鍋の中身を尋ねたところ、 返って来た答え

「ああ、これ? これはマジックポーションよ」

作るのが難しいポーションだ。加える魔力の操作が難しく、なかなか成功しないのだ。 それを、三分クッキングばりの気軽さでネモは作っていた。 マジックポーションの製作は錬金術師や薬師が一流になるための登竜門と呼ばれているくらい

呆然とするレナに、イヴァンが黙って首を横に振っていたのが印象に残っている。

を次々とこなしていくのを何度も見た。 レナには欠片も分からない高度な議論をネモと交わし、ネモから出された途轍もなく難しい課題 さて、そんなネモを師匠と呼び慕い、ネモに天才と言わしめるイヴァンもまた、普通ではない。

もって乗り越えているのをレナは知っている。 もちろんその課題をこなすのはイヴァンといえど簡単ではなく、 尋常ならざる集中力と努力で

天才がどうやって作られるのかを、レナは彼を見て知った。

も抱かなくなっているのが少し不思議だった。 そうやってもの凄い速さで走り続けている人たちを知っていると、兄や姉の話を聞いても、 頑張ってるんだ、という感想しか出てこなかった。 昔、確かに感じていたはずの嫉妬心を欠片がよる。 女 の 言を聞いても、 ふー

ヤメを引き剥がすのに忙しく、 そんなことよりもその年の冬休みは、帰省にまでついてきてエドガーに纏わりつくアニエスやア それが家族への執着が薄くなっていたからだと気づいたのは、もう少し後になってからだ。 他を気にする余裕はなかった。

つつ、彼女たちがエドガーの父母である自分たちを丁重に扱うさまに絆されていった。 お金持ちのお嬢様や、異国のお姫様がエドガー に夢中になっているのに驚き

「こんなに綺麗で気立ての良い娘さんたちがエドガーに良くしてくれて、 ありがたいわぁ

「なんでも言ってくださいまし」

ラッシュ家に上がり込み、 既に嫁気取りか! とレナの眦が吊り上がる中、 エドガー の母

言った。

「本当にエドガーにはもったいない子ばかりねぇ。 みんなにお嫁さんになってもらいたいくらい

この言葉にぎょっとしたのは、レナだけだった。

いつつも、まんざらでもなさそうだった。 アニエスとアヤメは嬉しそうにきゃあきゃあ言い、 エドガーは「勘弁してくれよ、 母さん」と言

この時、レナの心に一抹の不安がよぎった。

もしかして、 エドガー はこの中の誰かを選ぶつもりはないのではないか、

* *

ソウメイから実戦の中で勘を磨けと言われたのだ。 冬休みが終わり、学園に戻るとエドガーは冒険者ギルドで討伐依頼をよく受けるようになった。

ば、レナは最近エドガーと二人きりになれなくなってきていたのだ。 そんなエドガーに付き合うように、レナも一緒に依頼を受けるようになった。こうでもしなけ

雇って戦闘訓練を開始したからだ。 についていけないことを不服とし、それぞれが金に物を言わせて良い装備を買い揃え、 しかし、この時間もいずれはなくなるのだと分かっていた。なぜなら、アニエスとアヤメは冒険 良い教師を

「すぐに追いついてやるんだから!」

「エド様、待っていてくださいましね」

する自分を心配したネモとイヴァンが手を加えてくれた武器のハンマー頼りで、強いわけではない やはり本格的に鍛え始めて半年足らずの実力でしかない。レナだって、エドガーと共に魔物退治を 恐らく、彼女たちにすぐに追いつくだろう。エドガーは確かに学園入学前に比べて強くなったが

時間などはありはしなかったが、それでもレナにとってこの時間はとても大事なものだった。 それでも、少しはエドガーと二人だけの時間をとることができた。目的は魔物退治なため、

しかし、その時間は考えていたよりも早く終わってしまった。

をしろってお達しなのさ」 「ちょっとへマしちゃってね。 エドガーが、 冒険者の先輩だと言って、虎の獣人族の女性をパーティーに入れたのだ。 冒険者ギルドからペナルティをくらって、 初心者パーティ の指導

虎の獣人族の女性 ありがたい申し出なのは理性では分かっていたが、感情が余計なことを、 いかにも姉御といった風情の魅力的な女性だった。 -スサナ・グラセスは金髪金目の年上の女性で、日にやけた肌と豪快な口調 と叫んでいた

まかな弱点を知っており、 スサナは長年冒険者をしているだけあり、パーティーでの連携の取り方や、 それからはスサナを加えて行動し、 それをレナたちに教えてくれた。 彼女の指導の下、 レナとエドガーは着実に力をつけてい 魔物の種族による大 、った。

「ありがとう。勉強になるよ」

「フフン、アンタもなかなか筋が良いよ」

素直なエドガーを気に入ったらしく、 日に日に二人の距離は縮まっていき、 レナはやきもきして

そんな苛立つ気持ちをクラブで愚痴れば、 先輩たちは「なるほどねー」と頷く。

「それってアレね。ラノベの主人公っぽい」

「あー、アレか。『ハーレム主人公』」

「なんか知らんが、平凡だったはずの男にやたらと女が寄って来るアレ

うんうん頷き合う三年の先輩方の話を聞きながら、レナは眉間に皺を寄せる。

「その……、なんです? ハーレム主人公?」

なじみのない言葉だった。 しかし、 レナにとって不穏な気配のする言葉である。

「転生前の世界ではやっていたジャンルの物語よ。まあ大体は、 平凡だった男の子が、 ある日凄い

力を手に入れて女の子にモテモテになるの」

「それでその女の子たちを全員嫁にする」

く嫌悪感が湧く。 なら制度の外で好きにすれば良いとは思うが、 ネモとヘンリーの言葉に、レナは顔を顰めた。平民は基本的に一夫一妻だ。お互いが良いという レナはそんなのは嫌だ。 一夫多妻にはそこはかとな

「なんか、それって凄く現実的でないような……」

まあ、あくまで物語だからね。ご都合主義展開のオンパレードよ」

に子供ができても養うことができる」 「ただ現実的に考えられていた設定もあったぞ。まず主人公は金と権力を手に入れていた。 嫁全員

肩を竦めるネモに、チアンが言う。そんな二人に次いで、イヴァンが恐る恐る尋ねた。

その物語の女の子たちは本当に全員お嫁さんになるんですか? なんの争いもなく?」

「まあ、正妻がいたりもするな。高位貴族の娘で、強力な力を持った主人公を国に繋ぎ止めておく 「そうよ。主人公の取り合いをしたりするけど、なんだかんだ結構平和的に嫁になるわね」

ための政略が絡んだりしている」 「ご都合主義だからな。普通であればこんなに上手くいくはずがない。 複数の女を囲えば寵愛を争

う者が必ず出るし、離脱する娘もいるはずだ」

をしながら言う。 現在第十二妃まで抱え、更に十人以上の妾妃まで後宮に住まわせているカンラ帝の息子は遠い İ

「複数の女を欲しがるとは理解できんな。一人で十分だろうに」

「そうだなぁ。一人で十分だ」

後宮の闇を知る王子たちは頷き合い、重い溜息をついた。

きっと大丈夫だ。 そんな先輩方の話を聞き、 エドガーは先輩方が言う『ハーレム主人公』とは違い、金も権力も、 レナは冬休み中に感じた不安が再び頭をもたげたのを感じた。 特別な力もない。だから、

そんなレナを、彼女の隣に座るイヴァンが心配そうに見つめていた。 レナは俯き、「大丈夫。きっと、大丈夫」と小さな声で呟く。

* * *

時だった。 決定的なことが起こったのは、ある依頼の最中に、 ブラッディ・サーペントに遭遇してしまった

ざ食いちぎって食べるのだ。更には知能が高く、獲物を玩具のように嬲る姿も目撃されている。 のだと噂されるほどに残忍で、 ブラッディ・サーペントはAランクに分類される凶悪な魔物だ。赤黒い皮は血を浴びて染まった 他の蛇型の魔物とは違い、獲物をまる飲みするのではなく、 わざわ

まさかの遭遇に、 そんなブラッディ・サーペントが、 レナとエドガーはもちろん、スサナも愕然とした。 初級から中級の冒険者が多く利用する森に突如現れたのだ。

そんな状況の中、一番に我に返ったのはスサナだった。

「エドガー、レナ、すぐに町へ走ってこのことを兵士に伝えな!」

「スサナ!!」

スサナが腰の片手剣を抜き、ブラッディ・サーペントの前に立つ。

「こんな浅いところにいるなんて、 町がヤバイことになる! アタシが時間を稼ぐから、早く!」 すぐに町に行っちまうよ! アンタたちがこのことを知らせな

に狙いを定めている。 切迫したスサナの様子に一刻の猶予もないのだと知れた。ブラッディ・サーペントは既にこちら

はあと一歩及ばない。 レナとエドガーの実力は初級冒険者を脱するかどうかという程度で、スサナでさえ上級冒険者に

これではAランクの魔物には到底太刀打ちできない。 全滅は目に見えている。

それならば、スサナが言うように誰か一人でも生き残り、 町にこのことを知らせるのが一番大

だからスサナは覚悟を決め、レナたちにそう指示したのだ。

それが分かっているからこそ、二人は後ろ髪を引かれる思いで町へ走り出した。

しかし、途中でエドガーの足が止まる。

「エド!? どうしたの?」

「レナ……、俺……」

意を決したように、エドガーは強い瞳でレナを見た。

俺、戻るよ」

な、何言ってるのよ!!」

ぎょっと目を剥くレナに、エドガーは言う。

「俺、このままじゃ後悔する。 レナは町に行ってこのことを知らせてくれ」

「エド!!」

立ち読みサンプルはここまで

何を馬鹿なことを、と怒鳴ろうとするレナを、 エドガーは強引に抱きしめた。

驚いて思わず息を呑み、その間にエドガーはレナを離して元来た道を駆け戻った。

「レナ、頼んだぞ!」

その言葉を最後に、エドガーは森の奥へと姿を消した。

レナは一瞬迷った後、再び町へと駆け出した。

そして走りながら思う。酷い人だ、と。エドガーは後悔すると言った。けれど、 レナは誰よりも大事で、 大好きなエドガーを残して来てしまったのだ。 それはレナも同

これでエドガーが死んでしまったら……

レナの目から涙があふれる。

きっと、エドガーは死んでしまうだろう。だって、 相手はブラッディ サーペントなのだ。

的な未来しか想像できない。

なんで自分は一人で走ってるんだろう、と疑問に思う。

それは、エドガーがそう望んで、そうしなければ町に被害が出るからだ。

ずるいな、とレナは思った。

彼は後悔しかない世界をレナに生きさせるのだ。 エドガー は後悔をしたくなくて戻ったくせに、

レナにはその思いを味わわせるのだ。

酉し

酷い人

一緒に死んでしまいたい。

ブラッディ・サーペントが出たことを伝えた。 そんなことを思いながら、それでもレナは足を動かした。 そして、 町の門まで辿り着き、

その後は大騒ぎになった。

すぐさま討伐隊が組まれ、町は厳戒態勢をとった

レナはそのまま保護され、 詰め所の救護室で呆然としていた。 頭の中にはエドガーとの思い出が

延々と巡り、気づけば涙が出ていた。

看護師はそんな彼女の様子を見て、 心配そうな顔でタオルを渡すと、 テーブルに水を置い て行

錬金術師の成り上がり!? 家族と絶縁したら、天才伯爵令息に溺愛されました

てくれた。

それからどれだけの時間が経ったのか。ピリピリとした空気が詰め所に漂っていたが、

意に掻き消えた。そして、外から歓声が聞こえてきた。

何事かと思い、のろのろと顔を上げれば、救護室に先ほどの看護師が駆け込んできた。

「お仲間が帰ってきましたよ! 無事です! 生きてますよ!」

何を言っているのか。

帰ってきた? 誰が? 仲間が?

……エドガーが?

レナは弾かれたように走り出した。